平成 26 年度　第 3 回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会　会議録

日時：平成 26 年 12 月 2 日（火）18：30～20：40
会場：練馬区役所　本庁舎　多目的会議室

１　事務局長挨拶

本日の策定・推進評価委員会ではワークショップを行なうが、今日の議論を第 4 次の計画につなげていきたいと考えている。よろしくお願い致します。

２　配布資料確認

３　リサーチャーについて

前回の策定委員会で「第 4 次計画策定にむけて」の中で（仮称）住民リサーチャーについて提案した。今回は前回の委員会でいただいた意見をもとに再度検討したことをお示ししている。

第 3 次計画の取り組みの中で、各部署が小地域福祉活動を重点事業として取り組んできたことを第 4 次計画で更にすすめたい、主体的に活動する住民を増やしたいという思いで「リサーチャー」を提案した。

前回「リサーチャー」は評価するイメージが強いというご意見をいただいたので、名称を「地域福祉協力員」で提案したい。名称の候補としては、地域福祉をともに推進していただきたいということで「地域福祉推進協力員」というのもあがったが、長く覚えづらいということで「地域福祉協力員」とした。この方々には、小地域福祉活動の協働推進と評価をしていただきたいと思っている。

住んでいる住民だからこそ、その地域で活動されているからこそ地域の現状や変化をとらえられ、そこで何が必要か社協とともに考え、考えたことを地域づくりにむけて活動していくという役割を担っていただきたい。

第 3 次計画では社協の各拠点を活かして推進してきたので、今まで取り組んできたことを活かしながらすすめていきたい。地域福祉協力員として登録をしていただくことで、社協のパートナーとしてともに地域福祉を進めていくという意識をもって取り組んでいただけると考える。登録をしたというのが目に見えるようにバッチ配布等も考えている。1 月に社協として初めて会員の集いを行う。会員になっている方は社協を応援してくださる方。集まっていただいた会員の皆様にまずはお伝えしたいと思っている。今後、要綱を作成し、広く募集をしていきたい。住民懇談会はすでに地域で活動されている方々、または関心のある方に説明会を行いたいと思っている。イメージは懇談会。説明会は定義をしたあとに募集をするというイメージ。懇談会で地域の方々に地域の情報交換をしながら話をしていきたい。定期的な懇談会の開催も検討したい。

【質問・意見交換】

・委 員 長　1 月に会員の集いをやっていく上で、役割など具体的に考えておかないといけない。協働推進というのは具体的に何か、評価はどうするのかなどの説明が必要。いつからスタートして形作っていくのか、練馬区の日常生活圏域でやるのか、練馬区がやっている、似たような活動とどのようにすみ分けていくのかなど、質問がでそうなことはきめ細やかな資料を作って説明しないと難しい。相当作りこまないと多くの人たちを集め、その人たちを納得させるようにはならないと思う。いつから実際に動くのか？

・職　　員　まずは地域福祉協力員を募り、地域住民と一緒にやりたい、それも会員の皆さんに呼びかけるところから始めたいという事を考えたところ。今日は策定委員の皆さんに色々意見をいただきたいと思っている。先に具体的に説明してしまうとイメージが固まってしまう。本日ご出席の皆さんは地域福祉協力員だと思っている。そういう人たちを地域に増やしていきたいと思っている。それは本日のワークショップで検討していきたい。

・委 員 長　これから先は地域福祉協力員という言葉をつかっていくのか？

・委　　員　地域福祉協力員と言われたが、地域福祉協働推進員とした方が、自主的に推進するというニュアンスがでてくる。協力員は社協に協力するというイメージが残ってしまう。

・委 員 長　協力員よりは推進員の方が良いかもしれない。福祉推進員と言っているところはあるが、協働推進員と言っているところは聞いたことがない。

※次回の推進評価委員会で、要綱とともに協議する。

４　ワークショップ

・ワークショップ趣旨説明

各部署の職員が小地域福祉活動を意識した取り組みを行い気づいたことなどを意見交換しながら、その中で今後の方向性や（仮称）住民リサーチャーについてもこのワークショップで出していただき第４次計画に反映させていけたらと思う。

これまでに意識的に取り組んだ項目を社協職員で共有するため、職員対象にワークショップを 2 回行った中であがったものを例として「取り組み項目」にあげている。今回委員の皆様と職員とで意見交換をしていきたいので、手元の附箋に「気づき」「成果」などを書いていただけたらと思う。ワークショップ終了後は発表をお願いしたい。

～　各グループでワークショップ　～

・発表（発表順で記録）

E グループ

小中高生の体験学習の探検ツアーと関連した部分であるが、かたくり福祉作業所では地域に根ざしたつながりとして、小中高で継続して障害者の理解について学んでいただくことで卒業してからも地域に還元してくれているという報告があった。また、探検ツアーを行なうことで施設が地域に理解されていなかったということに気づいたり、地域交流イベントという機会を継続的につくる大切さを知ったという意見もあった。障害のある子供をもつ家庭のネットワークは強く口コミでひろがり、見学にくる人もいたようだ。信頼関係を築くためには継続することが大切。白百合福祉作業所では利用者を支援を受ける人という概念ではなく、利用者自身が主体となって伝えることで大きな効果を生み変わっていくということに気づき、見守り活動で近隣とのつながりも強くなっていったという報告があった。積み重ねをしていくことで信頼関係がうまれ、言葉を交わせるようになった。新しく取り組んでいくアイディアとしては、キャッチフレーズ作りや必ずしも「福祉」や「ボランティア」という言葉を使わず「体力づくり」とか「健康」とかという言葉で発信していくことが大切という意見もでた。

D グループ

白百合福祉作業所の見守り活動だが、もともとは見守りウォーキングをやっていた。今は仮設にいるので、今まで関わりのあった方ではなく、関わりのなかった住民に理解してもらうために、小学 1 年生の見守りや、挨拶をする、清掃活動をするなどしてきた。その結果、地域に知られ関係もできてきた。民生委員に見守りをお願いすることで利用者との対面をしてもらったり、日頃スタッフにはみせない姿を民生委員に見せたりということで関係がさらに深まっていった。総務係で募金箱の設置を行ったというのがあったが、福祉に貢献してくださいというとハードルが高くなってしまう。まずは募金箱をおくことで顔の見える関係ができ、お店も福祉に貢献しているというふうに地域の方に見てもらえる。大泉ボランティアコーナーが窓口となり、地域の福祉施設などが T－JOY で販売会を行っているが、もともとは募金箱をおいてもらったのがきっかけ。もっと成功体験をすることが大切。福祉作業所の方々が販売会をすることで利用者の方も力を発揮できるし、理解が深まる。

今まで社協は内にむかっている活動が多かったが、活動計画をみんなで考えることで部署の垣根をこえて協力しあえるようになった。これからも継続してほしいという意見もでた。住民一人一人が地域の現状を理解し、困難なことをみんなで語って、「やらにゃいかんぜよ」ということを意識してもらえるように社協は働きかけないといけないという意見もでた。

C グループ

パワーアップカレッジを卒業した方が活動を始めた。そういう活動を地域の方に紹介したりして繋がりを作っている。この方々は今後の地域活動の推進者になる人たちだと気づいた。社協の職員と顔見知りになって相談しやすくなったという意見もでている。社協は民生委員とのかかわりが強いというイメージがあるが、パワーアップカレッジやボランティア団体の情報があるので、ボランティアセンターだけでなく、他の部署も共有していけばもっと広がるのではという意見もあった。

白百合福祉作業所の活動は障害を持っている方が見守り支えるという視点、社会との関わりを担うという実感がえられた。地域の中で見守る仕組みづくりが必要。白百合祭りに「ういんぐ」も参加したが、祭りだけではなく白百合の商品を買いたい時に「ういんぐ」でも買えるとか、一体化した活動をしたらどうかという意見をいただいている。第 3 次計画の中では社協が何かするというよりは、社協と一緒に地域の中で何かする、地域としてつながり地域の住民として地域の中で何が必要かということを意識していくことが大切だった。そういう意識の中で今後も小地域福祉活動を進めていくことが大事だと思う。

A グループ

白百合福祉作業所は仮設に移っていることも、理解者を広げるためのチャンスととらえている。利用者の言葉が小学生の子供にはよく伝わり、分かり合えている。成果としては活動の見せ方を変えることで、地域の方への理解が深まったり、変わってくることもあった。場の設定に工夫が必要。肩肘張らない普段やっている活動を、見せ方をかえて活用してみるという意見がでた。一人ひとり職員が意識することで、見えてくることが違うというのがわかった。地域を作るのは弱い方が核となっている。障害をなんとかしなきゃいけないと思っているとそうなってくる、意識して動いていくことが大切。地域の住民を説得するのではなく、見せていったのが良い。地域で活発に活動しているひとを推進員にしていくのではなく、子育て中の母親や犬の散歩をしている人たちが人をつなげていく事があるので、そういう人たちが推進員になってくれると良い。

B グループ

白百合福祉作業所の地域活動のキーワードは「清掃」で、これは利用者が地域に出ていくひとつの手段でもある。色々な人と顔見知りになり、それがすすみ挨拶をかわす関係ができたのが良かった。きららも「地域に出る」ということで祭りに参加することを長年続けているが、そういうことで地域の人に認められる。役割を担うことで感謝されるようになり、挨拶をかわすようになった。地域での見守り体制ができてきていると思う。

かたくり福祉作業所のイベントに来てくれる人はある程度興味のある人、興味のない人をどのように巻き込んでいくかが課題。防災訓練を福祉園、町会と共催でやった。防災という皆が課題に思っている部分から入っていくことで、関係ができてきた。町会と町会をつなぐことで地域の中の見守りなどできないかということも意見ができた。ほっとサポートでは出向いて行って相談にのり、それを広げ地域の情報を逆にふやしていくという点が良かった。民生委員との関わりというところで、地域福祉協力員との違いはどこか？　役割の整理は必要、それをやってそこから一歩進んだことをやっていくのが良いのでは。生活困窮の家庭に対してお金を出すのだけがサポートではない。例えば学習指導をやるというサポートもあるのではないか。地域の見守りという体制をつくり、そこから一歩進んだ推進を行う必要があるのではないか。

・講評（事務局長）

E グループ

意識的に働きかける、学校とつながる、機会をどうつくる、信頼関係をどうつくっていくかという話が印象に残った。どういうふうに地域に働きかけていくのかが次なる展開の課題という気がした。

D グループ

小地域福祉活動に取り組んだことで社協が内向きから外向きに変わった、社協が活性化したという話が印象的だった。地域の方々にどうやって認めてもらうのかが次なる展開。

C グループ

地域に関係を持つと職員も生き生きとするということがわかったという意見が印象的だった。社協が地域でどう活動すれば生き生きとしていくのか考えるのが次なる展開

A グループ

地域の人が一番その人を知っている、初めてニーズがわかったという話があった。地域の情報をどうやって積み上げていくのかが次なる展開

B グループ

町会同士が仲悪い、どうやってつなげていくかという話があった。つなげるということが次なる展開。

地域福祉協働推進員が何をやるか？　どういうふうに認められるかなど、ひとつひとつ積み上げていくと、地域福祉協働推進員が何をやるか見えてくると思う。社協が外向きで地域に働きかけていくという発想の転換をしていく必要があると感じた。

５　まとめ

副委員長　皆さんとこういう形で話し合うのはおもしろい。社協が内向きから外向きにかわってきつつあるのかなと感じてはいるが、もう少し必要と思うし、「地域福祉協力員」の名前は色々考えた方がいいと思う。ワークショップで感じたことは、一番推進したのは白百合福祉作業所の利用者だったこと、推進員は彼らだったのではと思った。名前をつけるのは大事。

委 員 長　ワークショップの発表を聞いて、第 4 次計画の中で考えなければいけないこと、ひとつは地域の情報をどう吸い上げるか。地域アセスメントをきちんとする必要がある。どういう資源がありそれがどう機能しているか。これからは個別の展開になってくると思うので、かなり小さいエリアでやっていかないといけない。さらに、小地域活動にはどんな種類の活動があるのかを調べ、それぞれの地域で求められる地域活動は何か考える必要がある。どのエリアを小地域として設定するか。練馬区社協がもっている拠点、8 か所。一般的に小地域ネットワークの展開という例をいうと、1 エリアがマックスで 5 万、理想的なのは 3 万。練馬区でいうとマックスでいうと 14 か所。最適なのは 20 数か所。拠点が足りない。それをどういうふうにカバーするのか具体的に考える必要がある。小地域活動の中で、当事者や町会、民生委員がでていたが、専門職をどこに位置づけるか考えなければいけない。ゴールの部分では重要になってくる。顔の見える関係、継続、信頼関係、積み重ね、地域住民として、など目線や切り口はでてきていたので、それを第 4 次計画に盛り込んでいく。それぞれの事業所で芽を出した小地域活動の次の展開をどうするか。これはこの後の計画策定の中で議論していくと思う。

６　次回の日程について

平成 27 年 1 月 9 日（金）18：30～